

《東 ちづる》氏

Let's まぜこぜ～浅く広くゆるくつながろう～

### 「まぜこぜ」の社会とは

「まぜこぜ」とは、ダイバーシティ、多様性、ノーマライゼーション、インクルーシブネス、共生社会、共に生きる等の事を指します。私はこれらの言葉に親近感を湧かせるために、あえて「まぜこぜ」という言葉を使っています。

この言葉は、混ぜ御飯から考えました。「一つ一つの食材を生かして調理をして、最後にさっくりと混ぜ合わせる」、つまり、いろいろな配慮があれば、多様な私たちが混ぜ合わさって暮らしても、居心地がよくなるということ混ぜ御飯に例えて、「まぜこぜ」の社会を目指すという言い方をしています。

この活動を始めたきっかけは、慢性骨髄性白血病であることを告白した 17 歳の少年のドキュメンタリーを見たことからでした。多感な少年が、全国ネットの番組で自分の病気を告白してまで伝えたかったことは何だったのかがとても気になり、いてもたってもいられず、彼を探し当て、直接理由を聞きにいきました。すると、彼は「骨髄バンクというものができたので、それを伝えたかった」ということでした。

私はその言葉に沸き立つような思いでした。「噴火」という言葉は、英語で「ボルケーノ」と言います。諸説はありますが、ボランティアは、この「ボルケーノ」が語源という説があるそうです。私はその「噴火」するような思いで、この活動を始めました。そしてこれが後に、骨髄バンクをたくさんの人に知ってもらうための活動につながっていきました。

### 一般社団法人 Get in touch のはじまり

ボランティア活動を始めた当初、私は学校や企業、行政、団体、福祉施設の方々とつながりながら活動をしていきましたが、団体に属することなく個人で取り組んでいました。実は、私は団体とかファミリーというものが苦手なのです。しかし今は、一般社団法人 Get in touch という団体の代表として日夜、東奔西走しています。

あれほど嫌がっていた団体を立ち上げたきっかけは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災でした。あのときメディアを通して、「つながる、寄り添う、絆、日本は一つ、頑張ろう」という言葉があふれていましたが、現実はその言葉とは裏腹に、「頑張れない、つながれない、絆って何!?!」と思う人たちがいたのです。

被災地の避難所は、普段会わない多様な人たちも集います。まさに「まぜこぜの社会」がそこにはあったのです。その場所で、人々は救い合い助け合っていたかという、現実には難しいこともありました。段差の上り下りができない車椅子の人は、「ここはバリアフリーではなく大変でしょうから、他の避難所の方がいいのでは？」とやんわり断られたり、津波や地震の恐怖からパニックになり騒いってしまった自閉症の少年に対して、近くにいた男性は「うるさい。静かにさせろ。」と怒りをぶつけるということもありました。

あるご年配女性は、「私は皆さんに迷惑をかけたくありません。おじいちゃんのところに行きます。」と書き置きをして、夫の墓前で自ら命を絶つという痛ましいことまで起こってしまいました。

社会が不安に陥ったとき、普段から生きづらさを感じている人たちが、より追い詰められてしまうという現実があったのです。

社会的弱者という言い方がありますが、本来は誰もが弱者ではありません。社会の環境が弱者を生み出すのです。

これまでの社会活動での限界を痛感し、この社会を変えるには、支援団体や、福祉施設、企業、超党派の政治家、省庁など、みんなが垣根を越えて手を繋がなければならないと感じました。そこで私は、これらをつなげる団体をつくろうと思い、立ち上げたのが「つながろう」という意味である「Get in touch」です。

## エンターテインメントを通じた「なぜこぜ」社会へのアプローチ

私達は、障がい者や LGBTQ などの多様な人たちと関わったことがない人、社会は変わらないと思っている人たちをどう巻き込み、どう社会を変えていくかを念頭におきながら、皆さんとワクワクできるような活動を考え、取り組んでいます。

その一つに、全国各地にいる障がいのあるアーティストの方と企業をコラボレーションさせる企画活動があります。スターバックスコーヒーでは現在 44 店舗で、それぞれの地域のお店のテーマに合った作品を、障がいのある作家さんたちに描いてもらって、アート作品の常設展示をしています。

2020 年の 11 月には東京オリンピック・パラリンピック大会の、多様性と調和をテーマにした映像の構成・キャスティング・演出・総指揮のオファーをいただき、総勢 400 人の力を合わせて「MAZEKOZE アイランドツアー」という作品を作り上げました。

その過程でこんなことがありました。ツアーのタイトルを巡り、「MAZEKOZE」に対し、秩序を乱す発想に繋げる人もいるのではと一時難色を示す担当者もいました。「秩序」は大事ですが、右向け右で誰もが同一方向を向くことが果たして秩序であり、纏まった社会なのだろうか。みんなが好きな方向を向いている。でも支え合い、助け合う。これが多様性であり秩序は守られると。そうやって対話を重ねた結果、最後は納得していただきました。

私は、この作品制作であることに気がつきました。私たちが多様な人たちへ自然に振る舞えない原因、それは、そういった人たちと接する機会が少なく、単に慣れていないだけということです。そうならば、これから芸能界でも様々な人たちが活躍するチャンスが増えると、視聴者の皆さんの意識も変わる、そんな連鎖反応が起こるのではないだろうかと思いました。「学校や職場でもいろんな人たちがいたほうがいい、社会でも街でも。」そう思ってもらえるような影響力が私達にはあると思います。変わろうと思えば変われるのです。

## 誰とも比較しない

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生した時、私は避難所にいたある女性とやり取りをしていました。祖母と両親が津波にのまれ行方不明となり、彼女とその子どもだけが生き残りました。ある日、彼女から「お父さんが見つかった」と聞かされました。それは、御遺体が見つかり、一縷の望みもなくなったということです。彼女の声は元気なように聞こえましたが、平常心でないことはすぐに分かりました。私は「ねえ、泣いた？」と聞くと、彼女は「家族が全員流されて、遺体すら見つからない人もいるのに泣けない。」と言いました。私は、「他の誰かと比較しなくていいんだよ。あなたの悲しみや怒りはあなただけのものだから、泣いてもいいし怒ってもいいんだよ。」と言って一度電話を切りました。それからしばらくして電話があり、彼

女はしがみつくように泣き、私も一緒に泣きました。

それは怒りと悲しみの共有・共鳴という、お互いに重要な時間でした。その後、彼女は次第に元気を取り戻し始め、今は一歩ずつ前に進んでいます。

誰とも比較をしない、する必要がない社会が多様性社会、まぜこぜの社会だと私は思っています。大人の皆さん、どうかお子さんやお孫さんを誰かと比較しないでください。もちろんご自分もです。私は私であって、地球上でたった一人のスペシャルな人間ということを大切にしてください。そうすれば、みんなが楽に生きられる社会になると思います。

### 浅く、広く、ゆるくつながる

私たちがまぜこぜに、全ての人が居心地よく過ごすためには、浅く、広く、ゆるくつながる、いざというときに助け合える、駆けつけ合える、そんな社会がいいと思っています。

そして、つながりたくない人もいることを忘れないでください。そういう人たちを社会的に排除しないでください。嫌いな人がいてもいいのです。相性が合わない人とは距離を置けばいいのです。これからも皆さんと、浅く、広く、ゆるくつながっていきたくらいなと思っています。まぜこぜの社会を一緒に目指していきましょう。